

マスコミは今こそ国民の側に立った報道を

— 日米の軍事同盟強化には地方紙がそろって反対 —

フリージャーナリスト 齋藤 平

日本全国の新聞記者・放送記者たちはいま、超多忙だ。何と言っても高校野球は最優先の報道、放送テーマで、7月の地方予選から甲子園の決勝戦まで延べ何千人もの記者、アナウンサー、カメラマンや裏方が、選手たち以上の取材合戦を繰り広げている。

そのうえ、今年はポスト小泉の自民党総裁。茨城は候補者らしき人物を抱えているので地元紙（茨城新聞）もフォローに大変だし、全国紙の支局・通信部も総裁選関係は茨城県版でなく本版（一面・社会面）直行なので気が抜けない。そして師走県議選は4ヵ月後に迫り激戦区の情報収集も必要。引退する参院選民主党現職の後継候補の取材もある。

今年は新年早々から国内の米軍基地再編を巡って、麻生外相や茨城出身の額賀防衛長官が再三のワシントン詣で。沖縄県内の多少の基地再編と引き換えに米第一軍団司令部の座間移転、沖縄のF15戦闘機訓練の百里など国内五基地への拡散など受け入れてきた。

これには沖縄県内の二つの地方紙が猛反対。また抗議の社説が九州から北海道までの地方紙にそろって掲載された。全国紙では朝日が強い批判を掲げたが、あとは是認の論調だ。

一方、北朝鮮の核開発とミサイル発射騒ぎは読買や産経など大手紙とテレビが日本人の危機感を煽り、朝日や地方紙もその風潮に追随する形となった。こうした国民のファナティックなムードを敏感に見てとったのが額賀防衛長官の「ミサイル発射前に敵基地攻撃論」である。だが、これには茨城新聞はじめ地方紙はそろって反

対、強い警鐘を鳴らした。

全国紙では読買と朝日が抜きん出た部数を誇るが、読買は自衛隊のイラク派遣に賛成し、朝日は反対。テレビ各局は自民党や民主党の論客に「発射基地への専制攻撃論」を声高に論じさせた。有事下では国の放送機関と推定されるテレビ局がこれでは危険極まりない。

今年、茨城新聞は年初から憲法問題の長期連載を始めた。読者に憲法が蝕まれている現状と、憲法改正の動きの背景などを分かりやすく報告する好シリーズ。その後に連載した教育基本法改正問題シリーズでは「改憲と基本法改正の動きは同根」と批判。教育現場の声を紹介しながら民主的教育を守る大事さを訴えている。

全国紙やテレビ・キー局はいま、「安倍晋三内閣」づくりに手を貸しているが、靖国問題では読買が朝日とともに現状の参拝不可、国立施設設置で足並みをそろえた。地方紙は総じて靖国参拝に批判的だし、安倍氏の強権主義に抵抗感が強い。

健闘する地方紙だが、経済的基盤は弱い。朝日新聞が7月末からはじめた松下、日立、キャノンなど超一流企業の偽装請負労働告発のような大スクープは難しい。これから改憲の流れが強まり、有事法制の諸体制が定着するとマスコミの監視力も低下の恐れがある。マスコミ人の平和への信念、報道者としての勇氣、そして平和憲法を愛し、「日米軍事同盟」に反対する多くの人々の支援の輪が広がり突破力になることを確認し合おう。



全国民の怒りから生まれた

「原水爆禁止運動」



県原水協 事務局次長 綿引 悦郎

原爆を許すまじ

ふるさとの街やかれ

身よりの骨うめし焼土に

今は白い花咲く

ああ許すまじ原爆を

三度許すまじ原爆を

われらの街に

原水爆禁止運動の中で歌い継がれてきたこの歌は、1954年7月28日、音楽センター第7回定期演奏会「平和歌曲の夕べ」で林光指揮、中央合唱団の合唱により初めて公演された。この年の3月1日、ビキニでの第五福龍丸の被災を契機として原水爆禁止運動が全国に広まったことは第1回に譲るとして、この時「うたごえ運動」の指導者であった関鑑子は、5月につぎのように訴えた。

「原水爆反対の声が全国に満ちている時に、その歌声の創作がおくれている。原水爆への怒り、犠牲者への悲しみ、ひろく人類愛に訴える平和の歌は、小さい子供から老婆にいたるまで、総ての日本人に歌われるであろうし、全世界の友に訴えることであろう。」

この呼びかけに答えて、南部文学集団に属する労働者浅田石二の詩に日比谷高校社会科の教師木下航二が作曲したのが、この歌。

8月の「原水爆禁止第1回国鉄のうたごえ祭典」11月の「1954年日本のうたごえ」で歌われ全国に広まった。久保山さんの葬儀でもこの歌が歌われ、翌55年の世界大会で参加者全員で歌われ、8月6日からワルシャワで行われた第5回青年学生平和友好祭などをつうじて世界に広まった。（おわり）

広島原水爆禁止世界大会に参加して

増井 里依子

私は、民青同盟に加盟し、ひたち班を中心に活動しています。班の皆が、「世界大会に代表を送りたい！」と言う想いがあり、年配の方からご協力と応援を頂き参加する事ができました。去年参加した班員に、「学校では日本は2度と戦争をしないと習ったのにイラクに自衛隊を派遣したのは、何か変だと感じた」と言う平和に対する想い、「私達は被爆された方の経験を聞ける最後の世代だから」と言われ、小学生の頃知って衝撃を受け、核兵器は使ってはいけなかった気持ちの思い出し、「自分が世界大会に行ってもいいの」とぐずると、「何言ってるんですか、行きたいんですよ」と怒られたり、皆に背中を押され参加しました。

分科会は、青年のひろばで、被爆された方の経験を聞き、交流しました。広島・長崎で被爆された方の体験をお聞き出来る機会は、茨城ではなかなかないので貴重な経験でした。交流では、聞いた感想と、「継承」というテーマで自分達に出来ることは何か話し合いました。私は、班の皆と、同じ思いを共有し、平和に対する想い、核兵器廃絶に対する思いをはっきり持つことができ、参加することが出来ました。私が、出会っていない若い人も、友達も疑問や想いを持っている人がいると思います。だから1人でも、多くの人と思いを共有したいと思っています。そして、広島・長崎で起きた61年前の出来事を、次の世代に伝え、何世代にも渡って、歴史を風化させないように伝えていかなければならないと思います。

平和かわら版

446
月3回 発行

平和新聞茨城版

2006.8.15

発行：茨城県平和委員会

〒310-0912 水戸市見川5-127-281

Tel/Fax 029-251-2806

E-mail ibahei@amber.plala.or.jp



「真の国際連帯と平和のために」 - イラク・アフガンその後

やさと平和の会 柳岡 修二

7月22・23日、長野市で開かれた母親大会はそれまでとは打って変わって青空が広がりました。一日目はいくつかの会場に分散して各分科会、二日目はMウェーブ（長野オリンピック・スケート会場）での全体会でした。昨年の開催県、茨城からは約200人が参加。

私は妻と『真の国際連帯と平和のために イラク・アフガンのその後』と題し、論者の中村哲さんの現地撮影のスライドを使った講演を聞きました。

【中村さんの話し】

国際的支援というのは、現地の人々が本当に望んでいるものであり、現地の人だけで続けていけるものでなくてはならない。

彼らが望んでもいない、インターネットの普及率を上げることや、女性にブルカを脱がせることなどではない。

6～7000メートル級の山々が連なる地で、2000万人の国民の9割以上が農民・遊牧民です。彼らにはこんな言い伝えがあります。“金はなくても生きていけるが、雪がなくては生きてゆけない”

つまり、雪解け水が田畑を潤し、豊かな緑を広げていたのです。ところが、84年、有史以来の大干ばつで、一木一草はえない地域が大きく広がり泥水をすすることまで至っているのです。

農地の砂漠化により次々と村が消えてゆき、2000年、世紀の大干ばつに見舞われました。

栄養不足により、抵抗力の低下から普段なら簡単に治る病気も治らなくなってしまう。

アメリカはモスクや学校を爆撃していますが、このことがいつその恨みを買うことにつながっています。アメリカは『自由と

民主主義』を声高に叫びます。が、それで人々は果たして幸せになれるのでしょうか？

中村さんは日本の青年たちと、パキスタン・アフガニスタンで17年間、活動が続けられています。

アフガン人700人を指揮して、1000の井戸を掘り、全長16キロに及ぶ灌漑用水路をめぐらす作業に取り組んでおり、年間の診療数は約15万人です。

テレビに登場した現状を知らない『軍事評論家』の無責任さ、2001年の国連によるアフガン制裁の誤りを指摘しておりました。

現地の方たちの対日感情は、悪化しているようです。それは日露戦争のとき、大国相手に勇敢に闘った。それからアメリカからは原爆をおとされたことにより、友好的に感じていたそうですが、現在は強い国にペコペコし、弱い国に居丈高な態度をする国の印象を強めているそうです。

また、女性への診療には、女医でないと十分に診ることができません。男性の医者だと、肌に直接聴診器など当てられず、宗教上の理由からか、ワイセツ行為とされてしまうそうです。

真の『国際貢献』は、いること自体が危険を呼ぶ自衛隊によるのではなく、私たちの持っている技術のうち彼らが容易に手に入り、彼らだけでなくずっと継続できるものでなければならないのです。

国際貢献のあり方を、大いに考えさせられた報告でした。

7・30県平和委員会学習討論集会 感想

水海道在住 染谷 正樹

百里基地周辺の人たちは、基地容認派の人も含めて全員が米軍機訓練の受け入れには反対であるとのある意味では当然のことが集会では確認されました。

個人的には反対でも、地域社会の一員としては賛成せざるを得ないという動機づけは、騒音とか危険性とかの自然人としての要求よりも自分なりの正義を貫かなければならないという社会人としての意思が上回っている状況にあるということなのでしょう。

そしてここにこそ今日のイデオロギー闘争上の重要な問題を孕んでいるように私には思えます。

たしか渡辺治氏は、戦後民主主義の即自的な平和主義が軍帝復活を阻止し、同時にそれが軍帝復活の衝動要因となっていると指摘していたと記憶します。

今日、安保・自衛隊問題の宣伝にあたっては、大変だ、危険だ、平和が危ないという敵の意図の暴露に止まらず、千坂氏の指摘したとおり、今米支配層がやろうとしていることは今日の国際社会が到達した道理に合致しているのか、軍事力によって本当に正義が貫かれるのかとの問いかけが求められているのではないのでしょうか。

そのためにも、軍事同盟の変質の透徹した暴露が喫緊の課題となっているのだと考えます。

訂正

前号記事「“米軍機百里に来るな”地元のひとたちは」の筆者を水戸西平の会松原日出夫としたのは編集部誤りで、松原日出夫代表理事が「個人の見解」と前置きして集会で発言した要旨です。

守谷で「東京大空襲」平和パネル展

守谷平和の会会長代行 齋藤 哲

去る7月24日～8月24日まで「非核・平和都市宣言」の街・守谷市役所1階ロビーで「守谷平和の会」主催の平和パネル展を行いました。昨年は「広島・長崎」の原爆をテーマとして行い市役所を訪れる方々に大変好評だったと聞きました。今年は第2回目として「東京大空襲」をテーマとして開催しましたが昨年に引き続き多くの方々に見ていただきました。この10日間に平和の会会長をはじめ各会員が会場で写真の説明やアンケート調査の依頼をしたり、市民の皆さんと会話をするなど、アンケートにも約30名近い方々に協力いただきました。

会話の中では「このような悲惨な写真は見たくない。いまま世界

のどこかで戦争をやっている映像がテレビで写し出されるがそれを見るのが辛い。戦争を知らない若い子供達の時代になったら大変だ。この時機に平和の問題を取り上げてくれて有り難い」と70歳を過ぎた男性。又、女性の方で「こうゆうことを語り継いでいかなくてははいけませんね。大変良かったです。」と話してもらいました。そのほかアンケートに記載されていた中で「戦争の記憶が遠のき政治・社会が右傾化しつつある現在、平和憲法を守り維持する上でタイムリーな展覧会だと思う。毎年やってもらいたい」など多くの方から意見や感想をいただき「平和パネル展」の意義が市民の皆さんに十分伝わったように思います。

お知らせ

8月14, 15, 16日

事務所は休みます。



編集後記

「平和かわら版」を学習会に使っている。さらに、この新聞を読みたいから平和委員会に入りたい。という電話が会員から入った。なんとかの「冥利につきて」とはこのこと。
百名に近い参加者で盛り上がった討論学習集会、討論の時間が足らなかったが、その時期・地域にあった運動が大切。
かわら版も天の時・地の利・人の和を大切にしたい。(ま)